

小田 実

「共生」への原理

「共生」への原理

小田 実

筑摩書房

「共生」への原理

一九六六年四月二十五日 初版第一刷発行

著者 小田 実

発行者 岡山 猛

発行所 株式会社 筑摩書房

東京都千代田区神田小川町二ノ八
電話二九一―七六五一 郵便番号
一〇―一九一 振替東京六―四一
二三

装釘 ヒロンスン ヒエ
玄順恵

写真 三留理男

◎ 小田 実 一九七八年 晝印刷・積信堂
二九〇―四二五―四六四

もくじ

I	おびただしい死、おびただしい生.....	5
II	どんづまりからの認識.....	81
III	「アウシュビッツ」と「デイル・ヤシン」.....	113
IV	「存在のことば」、「運動のことば」.....	135
V	「訴える人」と「道行く人」.....	177
VI	「タガンタガン」の繁茂のなかで.....	209

「共生」への原理

I
おびただし死、おびただし生

一

「玉碎」ということばがあります。長年氣にかかって来たことばです。もちろん、氣にかかっているのはことばとともにことばがさし示すことがらですが、あまり氣にかかるので、機会をつくって、せめてものことに「玉碎」の現場の島に出かけることにしました。そこに何かが残っているというわけではありません。よしんばそこに「玉碎」の日本軍の兵士の遺骨のかけらが残されていたとしても、遺族ならぬ身、もって帰ってどうしようというでもないでしょう。ただ、そこで立ちどまって考えてみたかった。それだけのことです。

行先の選定には政治がからんでいます。というより、私自身のせいだと言ったほうがよいかも知れませんが、たとえば、アッツ島、これはまぎれもなく「玉碎」の島ですが、あいにくなことにアメリカ合州国の領土で、アメリカ合州国というところは私に対してなかなか入国の査証をくれない国です。ベトナム戦争反対運動でさんざんよからぬことをしたからというのでしょうか。カーターさんの政權になってからは事情は変わったかも知れませんが、ニクソンさんのときはおろか、すでにベトナム戦争がすんだフォードさんのときでも、いろんな術策をろうしてやつとこささまざまな制限付きの査証をくれる始末でした。

先方様には先方様の都合があるのでべつに文句を言っているわけでもないし、それほどアメリカ合州国に行きたいと考えているのではないのでたいして実害はないのですが、ただ、アッツ島にはこれで行けないことになりました。サイパン島も、今はアメリカ合州国の信託統治領とかいうものになっているので、行けないことになります。もちろん、またもやいろんな術策をろうすれば査証をくれないこともないでしょうが、「玉碎」の島に行くのに

そういうことはしたくない気持ちもたぶんにあります。こういうのは感傷と言うよりほかにない気持ちの動きでしょうが、人間、感傷なしには生きて行けないし、感傷が考えさせることもあるものです。

それで、タラワ島に行くことにしました。地図をひろげていただければ判ることですが、太平洋のどまんなか、赤道の少し上あたりにギルバート諸島という小さな島のひとつらなりがあります。来（七八）年には独立して小さな共和国をかたちづくるらしいのですが、そのひとつらなりの島のひとつがタラワ島です。北方にもうひとつ、マキン島があって、この二つ、「マキン、タラワの玉砕」というと、私ぐらいの年輩の人間なら、たいいていの人がおぼえている共通の記憶のようなものにちがいありません。そこまで行くためには、先年独立した、これもまたちっけな独立共和国のナウル島を通して行くのですが、ナウル共和国へ行つて来ると友人や知人に宣言するように言うのと、みんな、いちように、そんな国どこにあるんですかとことばを返します。ところが、タラワ島というと、あ、「マキン、タラワの玉砕」か、というぐあいに反応する人が私ぐらいの年輩の人間には多かったのは、それだけそのときの記憶が心にふかく刻み込まれているからでしょう。これは余談ですが、ナウルを知らなくて、「マキン、タラワの玉砕」のことを言い出した人のなかには在日朝鮮人、韓国人の友人がそれぞれひとりあていました。

ギルバート諸島は来（七八）年独立しますが、目下のところはイギリスの領土です。それで査証は難なく手に入ります。そういうわけでそこに行くことにしたのですが、もうひとつ、理由があつて、やはり、それは「マキン、タラワの玉砕」の衝撃が大きかったからです。アツ島の「玉砕」のほうが先で、そのときも衝撃を受けたのですが、「マキン、タラワの玉砕」のほうは今考えてみてもさらに衝撃が強かったような気がするの、アツ島のときはそれはまだ例外としてその事実を受けとめることができたからではないかと思えます。「マキン、タラワの玉砕」となると、そうはいかない。何か底知れぬほど不吉なことが本格的に始まったという感じでした。その不吉なことは中部太平洋というはるか遠いところで始まりながら、着実に北上してついには私のところま

で違ふ。そこまで私が感じとっていたかどうかは疑問ですが、そういう感覚のトバロのところには事実は思ひます。そして、それは私ひとりだけのことでなかったにちがいない。すでに、ガダルカナル島の戦闘が完全な敗けいくさであったことは子供の私にもはっきりと判つていたことでした。

「マキン、タラワの玉砕」があつて一月近く経つて、大本営ははじめてその事実の発表をしますが、一月近く発表をおくらせたのも、そういう日本国民の不安な気持をおもんばかつてのことではないかと思ひます。「日本国民」といういささか大げさなことを使つたので、ここで少しつけ加えておきたいのですが、その大げさで大時代なことをここでは私はまだ使つておきたいと思ひます。そのころは、人びとの気持がまだ「日本国民」というかたちで言いあらわしていい、いや、そうすべきものであつたからです。私自身のことを考えてみてもそんな感じがしますが、そうした「日本国民」感覚、あるいは、そのころのお題目的なことばで言えば、「日本少国民」感覚は沖縄失陥くらいまでのことであつたような気がします。このところは私のように大阪という大都会にあつていろんなものの崩壊をまのあたりに見た人間とそうでなかつた人間とが微妙にちがつて来ることなのですが、一九四五年八月十五日、いくさの終りを告げる報知を私はどうにも「日本国民」としてきいたような気はしないのです。ひとりの人間としてきいたというような当世風の口はばつたことを言うつもりはないし、たしかにそんな感じではなかつたのですが、さりとて、「日本国民」としてきいたのではない。その証拠にナミダひと筋流れなかつた。「日本国民」として天皇陛下に申しわけなく思つたわけでないし、ガシンショウタン、この仇は必ず討つべしと心にちかつたわけでもない。私はただ終つたなと思つていました。それでどうしようというのではない。ただ、終つたというわけです。タダの人になつていたのではないかと思ひます。もちろん日本が敗けたという意識はあつたのですから、たかだか、「日本人」——タダの「日本人」になつていたにちがいない。今私たちのたいていは「日本国民」として何をするというような気持はもつていないでしょうが、「日本人」という気持はもつていられるでしょう。そういうことのありようは日本の外に出たときによく眼に見えて来るのですが、海

外で出会う日本人は、商社員もジャルパックさんも、はたまた、すでにいささか時代おくれになりましたがヒッピー諸公も、その言動は「日本国民」というものではありませんが「日本人」という感じはして来ます。その感じが、ときには、あ、これは昔なら「日本国民」が出て来たんやな、と思ったりするときもあり、そうでないときもあったりします。自分の場合を見ていてもそうです。

だいぶ脱線してしまいましたが、さっき言いかけた通り、「マキン、タラワの玉砕」の大本営発表は当の「玉砕」の一月近いあと、昭和十八年（ここでも、そのときの私という「日本国民」の意識にそくして「昭和」という年号を使っておくことにします）十二月二十日に行なわれました。

次のようなものです。

大本営発表（昭和十八年十二月二十日十五時十五分）

「タラワ」島及「マキン」島守備の帝国海軍陸戦隊は、十一月二十一日以来三千の寡兵を以て五万余の敵上陸軍を遂撃熾烈執拗なる敵機の銃爆撃及艦砲射撃に抗し、連日奮戦、我に数倍する大損害を与えつつ敵の有力なる機動艦隊を誘引して友軍の海空作戦に至大の寄与をなし、十一月二十五日最後の突撃を敢行、全員玉砕せり。

指揮官は海軍少将柴崎恵次なり。

尚両島に於て守備部隊に終始協力奮戦せし軍属約一千五百名も亦全員玉砕せり。

簡単なものです。簡単なものだと思います。こういう発表の文章をいくら見ても、守備隊三千名、軍属約千五百名、あわせて、四千五百人の人びとがどのように死んだかはさっぱり判らないしかけになっています。あるいは、この軍属約千五百名のなかには朝鮮人も入っていた。彼らが何人いたか、そのあたりはこの発表を見てもうかがい知れないし、この発表の文章をのせていた防衛庁防衛研修所戦史室著の「中部太平洋方面海軍作戦(2)昭和十七年六月以降」のどのページを見てもまるっきり判らないことになっています。ただ、そこにつけたしの

ようにして書いてあった「玉碎」の生存者——つまり、生きのびてアメリカ合州国の捕虜になった人たちですが、そのなかに朝鮮人がいることで判ります（生存者はマキン島で日本人一人、朝鮮人百四人、タラワ島ではその数は日本人十四人、朝鮮人百三十二人になっています。もちろん、この数字はアメリカ合州国軍側の発表によるものです）。タラワ島の現地で出会った、彼らといっしょに飛行場設営のために働いた、いや、働かされた住民たちも、設営隊の軍属のなかには四種類の日本人がいたと言っていました。日本人、朝鮮人、「オキナワ」人、それにもう一種類、「トウキョウ」という人たちがいて、この「トウキョウ」人が何を意味するのか判りませんが、発電機の整備をしたりするような技術関係の人だと言っていました。この四種類のなかでいちばん重労働をさせられていたのは「オキナワ」人で、海岸から石を運んだり、ヤシの木を伐ったりするのは、たいてい、「オキナワ」人だったと彼らは言うのです。

いっしょに働かされた現地のギルバート人たちのことはあとで述べることにして、現地の人たちがそうした四種類の日本人を識別したのは、隊がたぶん四つあって、みんながべつべつに働いていたからですが、気にかかるのは、そういうことの内わけがさっぱり「戦史」というようなものには出て来ないことです。たとえば、さっきも言いましたが、朝鮮人は、いったい、何人いたのか。いや、帝国陸海軍というところ、軍人以外の軍属のことなど、それが純粹日本人であろうと「トウキョウ」であろうと、そんなものはタダ働きの労働力以外の何ものでもないと考えていたらしくて、「戦史」には軍人の数のほうはおおむね（と言っても、「推定される」という註釈が入っています。軍人でも下っぱは、もちろん、「推定される」ほうに入っている）キチンとした数字が出ているのに、軍属の数のほうはマキン、タラワ両島ともあくまで「約・名」です。大本営発表ではこの「約」は両島あわせて「千五百名」ということになっていますが、「戦史」の書き手の防衛庁防衛研究所戦史室の人たちが「推定」した「守備兵力」の表のなかの数字から私も「推定」してみるとどうしてももっと多くの数になります。「戦史」の同じところにのせてあった「米軍資料」では、そこははっきりとしていて、マキン島での軍属の死者は四

百十四人、タラワ島ではそれが二千二百十七人の多数にのぼっています。両島あわせると、二千六百三十一人の飛行場建設隊員が守備隊員といっしょに死んだことになります。つまり、約千人ほどが「大本営発表」より余分に死んだわけです。大本営発表では「三千の寡兵」ということになっている守備隊員の数は「米軍資料」ではマキン島で三百八十四人、タラワ島で二千六百十九人、両島あわせて三千三人で、こちらのほうは「大本営発表」もきわめて正確です。

「米軍資料」の数字は、もちろん、マキン、タラワ両島ともに全島にあまねくひろがってころがっていた死体を数え上げてでき上った数字であるわけですが、これはベトナム戦争でおなじみになった「ボディ・カウント」というアメリカ合州国軍お得意の奇怪な行為のはしりとなったものであるかも知れません。マキン島のことは知りませんが、タラワ島のことは飛行場建設に駆り出された二人のギルバート人キアキア・タラウさんとサム・ハイランドさんに話をきいたのでたしかなこととして言えるのですが、たたかい終ったあと、とにかく現地は「ノウ・ハウス、ノウ・トリ」で、はしからはしまでずっと見通せたそうです。そして、「ボディ・オール・オーバー・ジ・アイランド」——つまり、島は見わたすかぎり、死体。死体のおいが忘れられないと二人は言っていました。

死体は日本側、アメリカ合州国側ともにあって、どちらにもおいを強烈に放っていたわけですが、日本側の死体はそのままかき集めてあちこちに埋めたそうです。そして、その死体処理はギルバート人がやった——いや、ここでもやらされたということばが適切でしょう、やらされたのはギルバート人です。地面に穴を掘ると今でもいくらでも骨が出て来ると言っていました。たいして過去のことではないのですが、タラウさんが新しい家を建てるために地面に穴をあけると、ほとんど完全なかたちでガイコツが出現したということです。これは彼らの話ではなくホンコンからやって来てそこに住みついている中国人のフンさんの話ですが、彼はわずか数年ほど前に島に電話線を敷く仕事をした。そのときにはずいぶんそういうものにお目にかかったそうです。対岸の島から電

線を海底ケーブルで引いて来たときに砂浜近くの海のなかでひっかかるものがあつた。しらべてみたらそれは日本軍の戦車で、砲塔を開いてみたら、日本兵の死体があつた。戦車を動かしていたときそのままのかっこうで骨になつていたそうです。

さっきの二人の話にもどれば、ハイランドさんが「人が映画で見えることを自分たちは自分の眼で見たのだ」とまったく適切なことを言っていました。映画とちがつてにおいがした。そうも言っていました。それは私が空襲のときに体験したのと同じことなので、私は自分でも意識しないままで自然にうなずいていました。

二

マキン島までは足をのばすことができませんでしたので、タラワ島のことだけに話をしほりたいと思います。さっきからタラワ島、タラワ島と言つて来ましたが、ほんとうのところはタラワ島というのはそのあたりのサンゴ礁の諸島の総称で、たたかいのあつたのはそのひとつのベシオという名前の小さな島です。島というよりはサンゴ礁と言つたほうがよいもので（アメリカ合州国側は「島」ということばを使つていません。このあたり、すべて、「礁」ということばで呼んでいます。「ベシオ礁」というぐあいにです）、長さが三キロはありましようか、幅はいちばんふといところ七百メートルぐらゐの、細長い、そして何より小さい島です。車でまわれば、まず十分とかかりません。フンさんの「トヨタ」の車でまわりました。フンさんとはベシオ島までの小さなフェリーのなかで知り合いました。何しに来たかというので、「玉砕」のあとを見に来たという、それでは自分の車でまわつてやろうということになった。二日間、彼は車の運転手をやつてくれました。ギルバート人は親切で、見知らぬ人間にいくらでも助けの手をさしのべてくれるのですが、そういう親切は島に住む外国人にまでうつてゐるのにちがひありません。

どうしてそんな小さな島で、日米あわせると六千人ほどの死者を出すほどのたたかいが行なわれたのかという

と、日本海軍が飛行場をつくっていたからです。そして、どうしてそんなところに日本海軍が基地をつくったのかというと、ガダルカナル島で敗けいくさが始まって、ぜひとも、そこらあたりに基地をつくって制空権をにぎらなければならぬと海軍のえらいさんたちが考えたからです。そこへもって来て、昭和十六年の開戦以来、そのあたりでただひとつ、日本海軍が小さな見張り所をもうけて小人数の兵力を常駐させていたマキン島が、潜水艦を使つてのアメリカ合州国海軍の海兵隊の奇襲攻撃を受けて、「全員玉碎」するという事件がありました（マキン島の「全員玉碎」はしたがって二度あったわけです。二度目は、もちろん、はるかに大規模です）。そのあと、そのころはまだ日本海軍は力をもっていてすぐ奪い返したのですが、そういう事件もそのあたりで制空権をとらなければならぬという考え方にえらいさんたちを駆り立てたのでしょう、昭和十七年九月三日に陸戦隊によるタラワ島攻略作戦が行なわれました。「無血上陸」であつたと「戦史」は言っています。ただ、たしかに日本海軍に関するかぎり「無血」であつたでしょうが、ベシオ島のまんなかの墓地にはかなり大きな十字架が立っていて、はじめフンさんは、あれも日本人に関係のあるものかも知れないと言つてそこまで連れて行つてくれたのですが、十字架の下に墓碑銘をよくよんでみると、関係があるとしても、フンさんと私が予期したのとはまったく逆のものでした。日本海軍によつて殺された二十二人のイギリス人たちの墓だったので、念のために言つておきますが、ギルバート諸島はそのころも今もイギリスの植民地で、来年ようやく独立することはさきに書きました。

二十二人はベシオ島ばかりでなくギルバート諸島のあちこちでつかまつた人たちですが、この島にひとまとめにされてから、墓碑銘によれば、一九四二年（昭和十七年）十二月一日に殺されたのだそうです。銃殺されたという事です。彼らは「身二寸鉄帯ビズテ彼ラノ職務ヲ護持シタ」と書いてあつたので民間人だったらしいのですが、もちろん、「戦史」にそのあたりのことが書いてあるわけではない。二十一人の名前が彫り入れてあります。それをみんなして見ているうちに、ベシオ島への案内役を買つてくれていた今はナウル島で学校の先生をし

ているギルバート人のテボイタブ・ナタノさんが大声をあげました。二十二人のなかのM・A・サードさんという方が彼が昔学校で教わった先生だったというのです。いい人だったと言っていました。若い人でしたが、事業もしていて、かなりの金持だったということなので、ひと旗あげに本国からこの中部太平洋の植民地まではるばるとやって来た人物だったでしょう。はるばるとやって来たところで、ひと旗あげるまえにいくさになってしまった。このあたりのイギリス人はみんなフィジー島に逃げるように命令されていたのですが、その命令を拒んだところを見ると、なかなかの人物だったのかも知れませんが、あっけなく殺されてしまった。日本側は「無血」だと言っているのです、まるで殺されなかったみたいな殺され方です。私がナタノさんに話をきいたり、十字架の写真をとったりすると、彼自身とフンさんとが、こんなことを日本で書いたり、とった写真を出したりすると、日本でおまえの評判がわるくなるのではないか、日本人は怒り出すのではないかと真顔で心配し始めました。「非国民」になりはしないかというわけです。

この「無血上陸」のことを、ハイランドさんやタラウさんたちは、「日本人は何の通知もなしに勝手にやって来て、国旗をかかげた」とうまいこと言っていました。そのまえにはM・A・サードさんの祖国のイギリスが国旗「ユニオン・ジャック」をかかげていたわけですが、そちらのほうのかかげ方もまさしく「何の通知もなしに勝手にやって来て、国旗をかかげた」というものでした。タラウ島では今、なんとか先祖の文化遺産をまもりたいという考えをもつ人たちが集まって「トゥンガブルー協会」(「トゥンガ」はギルバート諸島、「ブルー」はエリス諸島のことです。どちらも昔からの呼び名です。ついこのあいだまで、イギリスはギルバート、エリスをひとまとめにしてそのあたりの植民地行政をしていましたが、エリス諸島は今では「トウバル」という名前でべつの地域になっています。来年、ギルバートとともに独立するはずですよ」という集まりをつくっていますが(ギルバート諸島にはまだ博物館はありません。なんとかしてつくりたいものだ、協会のキモ煎りが言っていました)、協会はじめてのトウシャ版刷りの出版が、女王様(ビクトリア女王です、そのころは)の命令を受けて「ユニオ